



## 保育の現場から

# 子ども園と共に

大川 理香

### 子ども園開設

新宿区では、四谷子ども園の開園に向け、プロジェクトチームを中心として準備を進めてきました。さまざまな準備を行う中で、私は「保育・教育計画」の作成メンバーとして幼稚園教諭と共に討議を積み重ねてきました。

新宿区の幼保一元化の理念の一つに「幼稚園の文

化と保育園の文化を融合し、あらたな価値を備えた子どもの育ちの環境を創造する』があります。どちらかの文化に束ねられてしまうという印象をもたれないようにするために、保育・教育計画を立てる際の言葉の使い方一つについても配慮し、討議しました。

たとえば、これまで幼稚園では「幼児」、保育園では「乳児と幼児」と分けていましたが、子ども園

では全体的にかかわることについては「子ども」という言葉をつかいました。また、指導計画に記載する「予想される活動」の中の「活動」という言葉には、乳児期は生活の部分の比重が大きいこと、幼児期は遊びとしての活動の意味合いが多くなることを踏まえ、「生活・遊び・子どもの姿を全て含める」ということにしました。

このように細かな点まで共通認識をしたらうえて、子ども園は平成十九年四月にスタートしました。

### 生活の違いに対する戸惑い

実際に開園し子どもたちとの生活が始まると、想像以上に戸惑いは大きなものでした。

幼稚園と保育園と二つの機能を兼ね備えている子ども園は、生活スタイルの違いがある子どもたちと一緒に生活していきます。そのため、保育者や保護者、そして子どもたちにもさまざまな戸惑いがあり

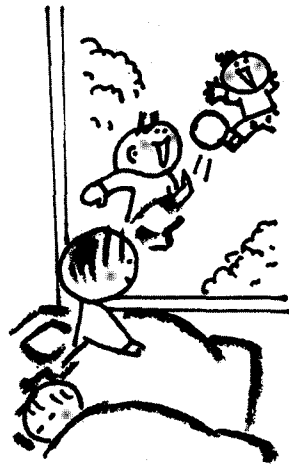
ました。電化製品などでは二つの機能を兼ね備えていると便利だと感じます。しかし、子ども園は、子どもの生活の場として、幼稚園としての機能、および保育園としての機能のどちらにも良い環境を保障しなくてはならず、不便に感じるものが多くありました。

子ども園での生活は、〇〜三歳児までは保育園と同様となっており、四・五歳児の生活は生活スタイルに合わせて選択できるようになっています。七時半から二十時半の開園時間のうち、九時から十五時の教育時間だけを選択している短時間保育児、十六時半までの中時間保育児、そして保護者が就労している長時間保育児の三つの基本スタイルがあり、さらに預かり保育もあります。保育者は、子ども一人ひとりの生活のスタイルを把握して園生活を保障していくことが必要ですが、これが実際には複雑であり、保育者には「どのように動いたら良いのか」と

いう戸惑いがありました。

さらに、子どもたちの遊び（教育）の充実を第一に考えてきた幼稚園教諭にとっては、教育時間内にお昼寝の時間があるということ、子どもたちの保育教育時間が勤務時間より長いということ、そして当番のための時差出勤や、土曜勤務のための振替の休みが平日にあるということなど、子ども園と幼稚園ではシステムの違いが多く、これらを理解していくまでに時間がかかりました。

五歳児は、幼稚園教諭の担当するクラスと保育士が担当するクラスの二クラスがあります。保育教育内容は打ち合わせをして共通化しています。日によって異なる職員の体制の中で、どのように共通化した活動内容を進めていくか、そのためにはどのような保育者が動くことが必要であるのかを表にしながら、毎朝確認することが日課となりました。お昼寝をする子どもとお昼寝をしない子ども。おやつを



食べずに帰る子どもと食べてその後も遊ぶ子ども。子どもたちの生活のスタイルが違うため、それを保障していくことは開園前に想定していた以上に大変なことでした。

生活の違いによる戸惑いを感じたのは、保育者だけではありませんでした。子どもたちも、これまでの生活との違いを感じていました。

「お弁当」から「給食」への変化に対しては、初めは野菜や煮物など苦手なものがでるとなかなか食が進みませんでした。が、「みんなで同じものを食べ

る」ことで、友達の姿が刺激となつてスムーズに食べ慣れていくことが可能となりました。

しかし、「寝る」「寝ない」の違いに対しては、「どうして遊んでいる子がいるのに寝なくてはいいの！」

「寝ないで遊びたい！」

などと、子どもたちが納得できずにイライラ状態となっていました。「同じクラスの友達が遊んでいる中でお昼寝をしたくない」という子どもの気持ちも理解できます。しかし、保育時間の長い子どもたちにとっては、お昼寝（休息）を取らずに過ごすことは、夕方以降の状態にも影響します。保育者にとっては、どのように対応したら良いのか大きな悩みとなり、試行錯誤の日々でした。

## 幼稚園教諭と共に

保育者自身も「幼稚園」と「保育園」という異なる

環境の中で経験して培ってきたことの違いやとらえ方の違いから、自分なりの保育教育ができないとストレスに感じたり、共にやっていくことの難しさを感じたりもしました。すべてが初めてのことであり、前例がない中で保育教育を進めていくことには戸惑いや悩みも多かったです。互いの経験を生かし合い、力を合わせていかなければ前には進めない状態の中、いつしか互いにかけてえのないパートナーとなることができました。

理解し合えた理由は、「子どもに育てたいもの」が共通していたからだと思います。幼稚園教諭・保育士という違いは問題でなく、保育者それぞれの保育観をお互いに理解することが重要であると、改めて感じることができました。

私にとって、幼稚園教諭と共に保育教育が行えたということは、子ども園に配属になったからこそ経験できたことであり、自分の保育教育の考え方を違

う角度から見直すきつかけとなりました。ほんの些細なことにも双方に意図することがあり、互いの考え方の違いを話していると、幼稚園と保育園の違いを感じました

その一つに「セロハンテープとのりの使い方」というエピソードがあります。

子どもが空き箱を使って自由に製作を楽しんでいる時のことでした。セロハンテープを思う存分に使って次々空き箱やトイレットペーパーの芯を組み合わせて作っていく姿に「ちょっと待って！ セロハンテープ使い過ぎじゃない！」と思った私でした。保育園で勤務していた時も、セロハンテープやガムテープは子どもたちが製作をする中で使っていました。のりで付く素材ならばのりを使うことを知らせたり、使い方や使う量を知らせたりしていくということが先でした。それに対して幼稚園教諭は、「くつつきたい」と思った時にすぐ、くつつける

ことのできるセロハンテープやガムテープをふんだんに使い経験していく中で、その適量を知らせたり、気づかせたりしていくという考えでした。保育園で勤務していた私が、

「無駄のないように……」

「代用できるものは？」

「リサイクルできるものは？」

といつも思っていたことは対照的でした。

このように、教材の与え方一つについても、幼稚園と保育園では違いがありました。

### これからの子ども園

子ども園が開園して三年目となりました。初年度のような保育者の戸惑いや子どもたちの戸惑いも今ではなくなりました。子どもたちも「集団生活は子ども園が初めて」であり、いろいろな生活スタイルがあることに疑問を感じるというよりも、ありのまま

まを受け入れているように感じます。保育者自身も一年の流れに見通しがもてるようになってきたように思います。

子ども園は、幼稚園としてのニーズ、保育園としてのニーズおよび子育て支援としての役割をすべて兼ね備えている必要があります。これらのニーズおよび役割に対応していくには、仕事量も忙しさもそして毎日の慌ただしさも、これまで経験した中で最もハードなところだと思います。しかし、新しいものにチャレンジしているということ、道のない所に道を作っているということが楽しみでもあり、次への活力となつていっているように思います。

子ども園だからこそ、これまでとは違った角度から子どもの育ちについて気づいたり考えたりできていることもあります。そして、何よりも子どもが良くも悪くも率直に反応を返してくれるからこそ励みとなつているのだと思います。

教育の場でもあり、生活の場でもあるということ意識したうえで、子どもが一日を過ごすにはどのような環境がふさわしいのかということを工夫していきながら、子どもたちが心豊かに過ごせる園づくりをしていきたいと思っています。

そして、いつの日か行政も一元化され、幼稚園教諭・保育士という区別なく子ども園保育者となることにより、いつそう働きやすい職場となつていくのではないかと思います。

### 最後に

これは私自身が四谷子ども園での二年半の中で経験を感じたことであり、私自身もはじめの一步を踏み出したばかりです。これから先、さまざまな地域に広がっていく子ども園に従事される保育者の方々と共に、子ども園の良さを伝えていけるようになりたいと思っています。

(新宿区立四谷子ども園)